

競走馬デビューを目指す 若駒たちの能力検査

馬主からきゆう舎に託され、調教を積んだ馬たちは、明け二歳でいよいよデビューに向けて「能力検査」に臨みます。

生産者や馬主に見守られ 難関に挑む二歳馬たち

ばんえい競馬の能力検査は、かつては定数制を採用し、受験頭数千頭に対し、合格馬は二百頭余りという狭き門だった時代もありました。現在は、競走馬確保のため合格基準タイム制を採用しています。



平成28年度第1回能力検査に挑む2歳馬たち。



平成28年度第1回能力検査の出走馬名簿。

受験対象馬は二歳全馬と三歳以上のばんえい競馬未出走馬。合格基準タイム内に完走できるかどうかだけでなく、競走能力や調教状況なども検査されます。能力検査は例年四月から八月までの間に計十回実施されますが、最も受験馬数が多く、関係者のみならず熱心なばんえいファンからも注目されるのが、初回の検査です。平成



掲示板に張り出された成績表をチェックする関係者。



生産者や馬主が一堂に会し、レースの行方を真剣に見守る。

二十八年度の第一回能力検査には、各地の生産者が手塩にかけて育てた一八〇頭が参加。牡四八〇キロ、牝四六〇キロの重量をひき、レースを行いました。

レースに慣れない若駒たちはいなきを上げたり、辺りを見回したり。表情もどこかあどけなく、障害では苦戦する姿も。コース脇には「我が子」を見守る生産者や馬主たちの真剣な顔が並び、普段のレースとは違った緊張感に包まれます。

晴天のこの日、一分十二秒の一番時計を記録した陸別町のホクシヨウムゲンを筆頭に、一三四頭が検査に合格。合格率は七四・四パーセントでした。合格した馬は、新馬戦などで順次デビューを

果たします。一方、不合格だった馬は、再検査に挑むこともできませんが、すぐにせり市にかけられることもある厳しい世界。デビューしても成績が振るわなければ、再検査の指示を受けることもあります。こうした難関をくぐり抜けた馬だけが、レースの表舞台に立ち続けることになるのです。